

## 【書 評】

松永幸子著 『近世イギリスの自殺論争』  
(知泉書館、2012年)

広瀬 裕子  
(専修大学)

本書は、著者が2009年に東京大学から博士(教育学)の学位を授与された学位論文に加筆・修正を行ったものである。

本書の構成は以下のようになっている。

### 序章

#### 第I部 自殺論争

##### 第1章 自殺擁護論の系譜

##### 第2章 自殺批判論の系譜 自殺批判論の動揺と反撃

##### 第3章 医学的自殺論の系譜——自殺の医療化

#### 第II部 人道協会(Human Society)の出現とその思想

##### 第1章 イギリス初の自殺防止・人命救助団体の出現とその活動

##### 第2章 RHSの思想と教育——コーガンとグレゴリーを中心に

##### 第3章 RHSにおける牧師たちによる自殺防止論と教育論——「同情」・「家族」・「愛国」

#### 終章 おわりに

内容の概略は以下のようになっている。

「序章」において、研究課題と方法等が記され、「第I部 自殺論争」では、17、18世紀イギリスの自殺論争が検討されている。「第1章 自殺擁護論の系譜」では、自殺把握のキリスト教的伝統を概観し、アウグスティヌス、トマス・アクィナスの流れの上で自殺論を著したジョン・シムが言及され、最初の自殺擁護論とされるジョン・ダン「ピアタナトス」が検討される。更にチャールズ・ギルドンとヒュームの論が取り上げられている。「第2章 自殺批判論の系譜 自殺批判論の動揺と反撃」では、自殺擁護論に応じるように展開された自殺批判論が検討されている。続く「第3章 医学的自殺論の系譜——自殺の医療化」では、自殺が神経病の一種とみなされて自殺の医療化が進む動きが扱われている。

「第II部 人道協会(Human Society)の出現とその思想」では、18世紀後半に設立されたイギリス初の自殺防止協会とされる王立人道協会(Royal Human Society, RHS)の設立理念や活動が取り上げられている。「第1章 イギリス初の自殺防止・人命救助団体の出現とその活動」では、

設立者ホーズによる趣意書から協会の目的が明らかにされ、更に当時の年次報告と新聞記事などで協会の活動の様子が明らかにされている。「第2章 RHSの思想と教育——コーガンとグレゴリーを中心に」では、RHSの思想が医師コーガンと牧師グレゴリーの論によって明らかにされ、教育観、自殺観、モラル観が抽出されている。「第3章 RHSにおける牧師たちによる自殺防止論と教育論——「同情」・「家族」・「愛国」」では、協会が、重商主義的思想を追い風にして国富・人口増加への貢献という活動を普及させたということが指摘され、「終章——おわりに」では、再度、著書全体の要点が整理されている。

本書の目的を、著者は、やや控えめに次のように述べている。「現代における自殺把握を成立させた歴史的基盤に、どのような自殺・生命把握の史の変容、ないし重層が前提されていたのかを考える契機としたい」（序章 p.14）。この目的に照らすならば、十分に本書は目的を達している。

キリスト教義に則って大罪だとされていた自殺を、神の意向と整合させつつも近代的な自己認識を介在させて自殺を擁護する論が形成されてくる様子は、十分再現されているし読んでいて面白かった。17、18世紀イギリスの自殺論が擁護論、批判論、医学論の三系譜で展開し、「自殺は犯罪であるか」という問いをめぐってはじまる自殺論争が、「自己」とは何かという新たな軸と交差して、「自己保存」「狂気」「モラルティ」を論点としながら展開する様子を、本書は見事に描いている。そこに見られる生命観やモラル観が、自殺防止のための家族・教育・治療論にリンクし、生命把握と自殺防止に大きな役割を果たした人道協会の設立に繋がる流れも解りやすい。

論者相互の絡みも興味深い。自殺論議の鍵的概念のひとつである「自己保存」理解では、自殺擁護論を展開したジョン・ダンが、生命を超えた「自己」は自殺によっても消滅しないという論理で自殺を肯定した一方で、「自己保存」理解を「自己保存」＝「生命の保存・維持」と理解していたホブズは、逆に自殺を批判したことが指摘される。そのホブズが掲げる「個人が彼自身の帝王」という考え方が「不正行為や卑怯行為の最悪の結果と繋がる」として、自殺批判論者たちに非難されるのであるが、自殺批判論者に批判される形となったホブズに自殺擁護論者が親和感を持つことになるという複雑な構図が紹介されている。

次第に自殺の原因を宗教的な要素ではなく「狂気」や「心神喪失」と理解するようになり自殺論議が医療化していく様子も、いかにも世俗的価値観が社会を席卷していく近代社会の生成期らしく、近代生成期にこそ見られる論理のダイナミズムの一端が伺える。しかも、自殺の理由としての「心神喪失」が増加した背景に、検視の審判にかかわる陪審員が遺族に対して同情の念を持つだけでなく、遺族から賄賂を受け取るなどして犯罪的意味合いのない心神喪失として判定する不正も横行したらしいことなどは、さもありませんと思われるリアルな背景で、引き込まれる。

当時の文献を丁寧に読み解いて自殺論争の周辺を明らかにした著者の作業は、高く評価されてよい。

しかしながら評者が残念に思うのは、著者が注目した近世イギリスの自殺論争という題材は、「自殺と自己決定に関わる議論の源泉は200年以上前に展開されていた」のだ、という発掘的価値にとどまらない学問的広がりを持つものではないかということだ。それへのチャレンジが本書では禁欲されている。「禁欲」と評者が理解したのは、著者自身もそうした可能性を予感し

ていると思うからだ。自殺に関する緒論を個々の論者の論として検討するにとどまらずに、人道協会の設立という時代状況や世相とも重ね合わせて立体的に把握しようとする著者の姿勢や、所々に断片的にはあるが挿入されているフーコーやロック、そしてホブズなどの関連思想の選択は、近代の特質を描き出すというテーマを著者が持っていることの証左であると思う。また、序章と終章で宮沢康人や寺崎弘昭の教育史研究に本書を連関させようとしていることも、著者自身がイギリスの自殺論という素材を、教育をフィルターにして近代社会を再把握しようというスケールで見ているからだろう。確かに、「第2章 第3節 RHSにおける牧師たちによる自殺防止論と教育論——「同情」・「家族」・「愛国」」に見られる、自殺論議を重商主義との関連で解釈しようとするコメントなどは、この自殺論議に対する解釈をどのように膨らませていくかの一つのアイデアとして読めるが、本書の流れとしては残念ながら連関的に述べられてはおらず印象論にとどまっている。

また、著者が自殺論争という題材をどのような構図で論じようとしているのかを評者が明確に汲み切れなかったことも一因だと思うが、読んでいて論理を共有できない場面もままあった。特に自殺論議と教育論をつなげていく局面にそれは多かった。

たとえば著者は、自殺批判論者はその「矛先」を教育論に向けていくとされているのだが（終章）、評者には自殺批判論者が「教育論」を攻撃の対象としたというよりは、逆に著者も指摘するように、彼らは自殺防止のために教育の必要性を感知して教育の仕方に言及したということなのではないかと思われたのだが。また、教育が重視される場所では、「意外なことに」ヒュームらの自殺擁護論者もその点については共通していたとされるが（終章）、評者にはそれが「意外」には思われなかったのだ。教育は、違った立場から重視されるという特性をそもそも持っているだろう。また、教育論が重視した「恥」が自殺の原因ともなり得ていたというところでは、自殺防止のために提案された教育が結果として自殺を生産するという「近代教育の内包する矛盾」というようにくくられているのだが、「恥」概念が一様でなくさまざまに理解される多相性を持っているとしても、「近代教育の内包する矛盾」とするには言葉を足す必要があるのではないかと思われた（終章）。

評者の理解不足を顧みず評者が感じた疑問点なども記したが、著者が資料を発掘し丁寧に読み解いた業績の意義は、当然ながらそうした疑問によって損なわれるものではない。魅力的な題材に注目した著者の眼識に感服するとともに、更なる研究に期待したい。